

文化庁

44. 5

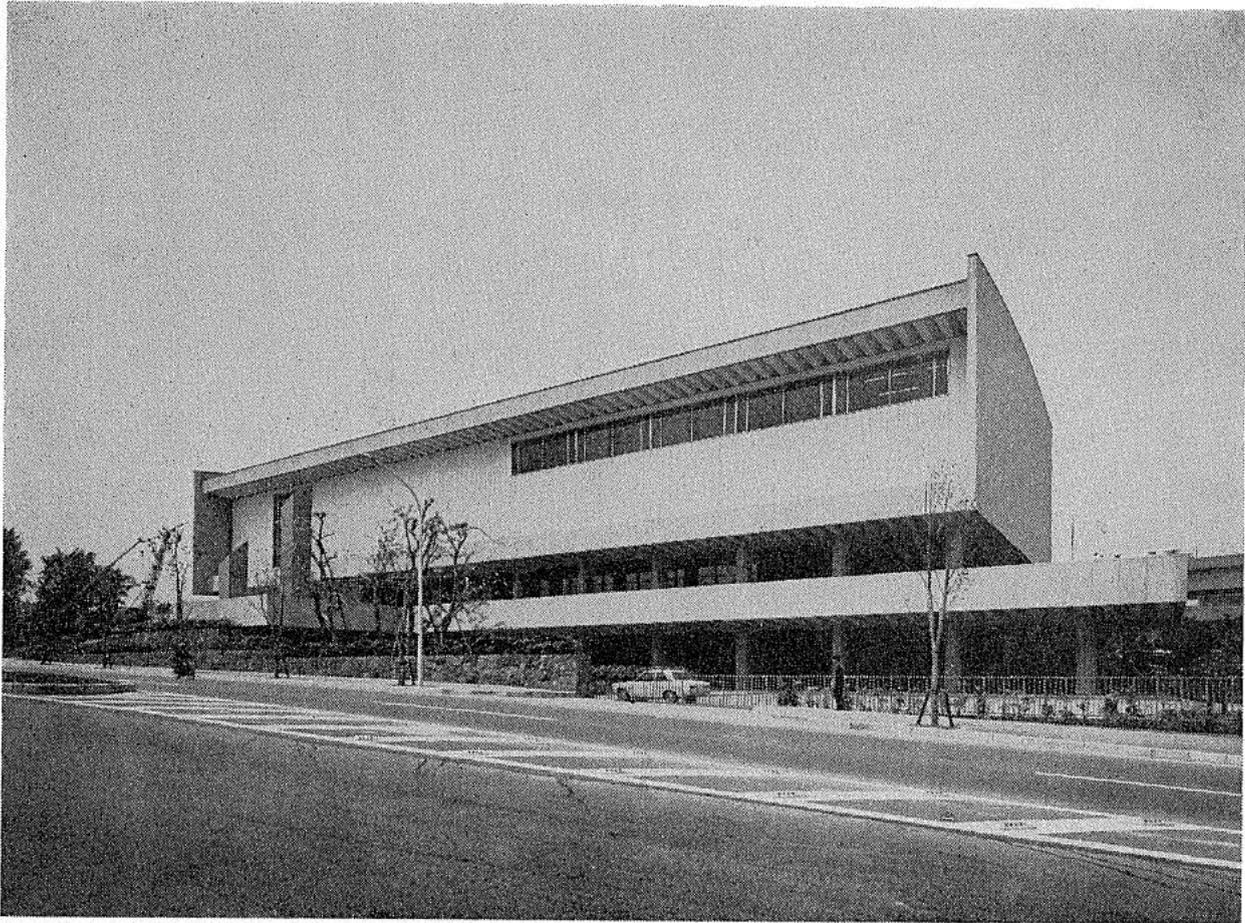
〈月報〉

昭和44年5月15日 発行

編集発行 文化庁長官官房庶務課
東京都千代田区霞が関3-2-2
電話代表 (581) 4211
郵便番号 100

—〈第9号〉—

(題字=今日出海 文化庁長官)



・もくじ

- △新著作権法案—国会に提出……………2
- △日本芸術院賞受賞者決まる……………4
- △昭和43年度芸術選奨授賞式……………5
- △東京国立近代美術館新館落成……………6
- △地方芸術文化行政の状況調査
報告書まとまる……………7
- △昭和44年度宗教法
人実務研修会……………8
- ▽文化財(美術工芸品)の
管理強化……………8
- ▽開発に伴う埋蔵文化財
緊急調査の最近の傾向……………10
- ▽文化財保護法公布記念日
—文化財映画のつどい—……………10
- ▽第一回文化財補助金
交付決まる……………11
- ▽沖縄文化財の復旧に対する
技術援助……………11
- ▽重要無形文化財保持者
認定書交付式……………12
- ▽伝統工芸春の展覧会……………12
- ▽文化協定の締結……………13
- ▽国立博物館・美術館だより……………14
- ▽地方だより……………15
- ▽文化庁日誌▽人事異動
▽会議予告……………16

△写真▽
新しい東京国立近代美術館全景

東京国立近代美術館

新館落成

東京国立近代美術館は、数年来移転の候補地をさがしていたが、北の丸公園の一角に移転することとなり、昭和四十二年三月、現在の京橋が建物の狭隘さ、隣接建物の危険、駐車場の不便などのために新築を開始してから、満二か年、このほど講堂と外構工事を除いてほぼ落成した。そのため、住みなれた京橋から

この新館への移転作業を、三月十日から開始して同二十日をもってすべての移転を完了した。

新東京国立近代美術館は、周知のとおり、同館の評議員であり美術に特に理解の深い石橋正二郎氏の寄贈による建物であって、設計は、東洋館をはじめ最近多くの博物館、美術

館の設計に経験豊かな芸術院会員谷口吉郎博士によって行なわれた。大きさは、京橋旧館の約三・八倍、一万三千平方メートル強の広さを持ち、東洋館と同様二・三・四階の展示場は、階層をかえた中三階、中四階を設けることにより、観客がしらすしらすのうちに階を上るよう意図

され、漸進的なゆとりある観賞ができるよう立体的な構成となっている。また、中三階、中四階のところには吹き抜けを設け外光を入れるとともに、立体的な空間に変化を与え、さらに多様な現代美術の展示に応ずる一方、鑑賞者の視線に高低を与え近代鑑賞の効果を高められるよう考慮されている。

最近、特に重要視されている照明と空気調節は、前者はそのほとんどを白熱灯を主とした人工照明により、移動可能なスポットを多用して壁面を照射し、所要の照度を得る方式を採用している。後者は全館の温湿度は地下機械室の中央監視室で、自動的に操作調整できるよう配慮されている。特に美術館の生命ともいべき作品収蔵庫については、新営調査委員の熱心な検討をもととして、大小二室に大別し、その前に予備室を置き、絵画の保管方式は、従来どおりスクリーン形式を採用することとした。特に新しい試みとしては、コンクリートから発生する「アルカリイオン」防止のため、改蔵庫全面にひのき板を張りめぐらせたこと、これは、東京芸術大学の資料館のほかは、従来あるもののほかは収蔵庫に例をみない方式であると思われる。また荷物搬入口および通用門は裏口二階となり、その前面の高速道路下は駐車場として利用される。事務室は四階の東半分をこれにあてている。

新美術館への道順としては、地下鉄東

西線を竹橋で降り、毎日新聞社側から竹橋を渡れば目前右手に渋い色調の建物をみればこれが新美術館である。一階玄関をはいれば、正面から右手一帯は広いロビーとなり、このロビー上の大壁面には菅井汲の大壁画「フェスティバル・ド・トウキョウ」がかかり、その前に豪華なホテルのふんい気をもったらせん階段があつて二階と連絡している。入り口から直進すると左手に皇居東御苑の緑を借景した屋外展示場がガラス戸越しにながめられ、そこには幾点かの近代彫刻が並べられている。一階突き当たりは、約五百平方メートルの広さをもつ企画展の主展示場で、特設展示用パネルの利用により壁面を自由に増設調整できるよう企図されている。この展示場に続いて約二百平方メートルほどの小展示室があり、ここを通過して前記ロビーに出、左手に大壁画を見ながららせん階段を上り二階展示場に導かれるようになっていく。二階中三階を過ぎると、宿願の日本近代美術の常設展示のための主展観場である三階に至るが、この三階展示場は、全壁面のほとんどに固定陳列ケースが設備してあつて、日本固有の屏風・軸物等の展示が安心してできるよう配慮されている。約五十メートルをこえる見通しをもち、展示場中央には休憩用のコーナーを設ける等、新美術館の「メインフロア」として最も自慢するに足る大展示場となつている。なお一階に特定作家の展示コーナー

が設けられる予定である。中四階四階西半分は、油絵版画の常設展示場にしたきられているが、四階最終展示場を出たところは広いロビーとなり、休憩用いす卓子を置き、皇居の緑をながめながら、ゆっくり休息できるよう喫茶設備も設けられている。

現在北の丸公園として着々整備されているこの一帯は、美しい宮城の濠と石がきを残しているところであるとともに、濠をへだてて近代的なパレスサイドビルと対し、北側は高速道路をはさんで高く科学技術館をのぞむ新旧風景のいりまじったところである。屋外展示場の石がきや、一階正面口の変化に富んだテラスと館前面にそって長く作られた二、三階テラスは、付近の風景に新美術館の外観が美しく調和し、この環境と美術を鑑賞する人の気持ちとが巧みに融合するよう考えられている。

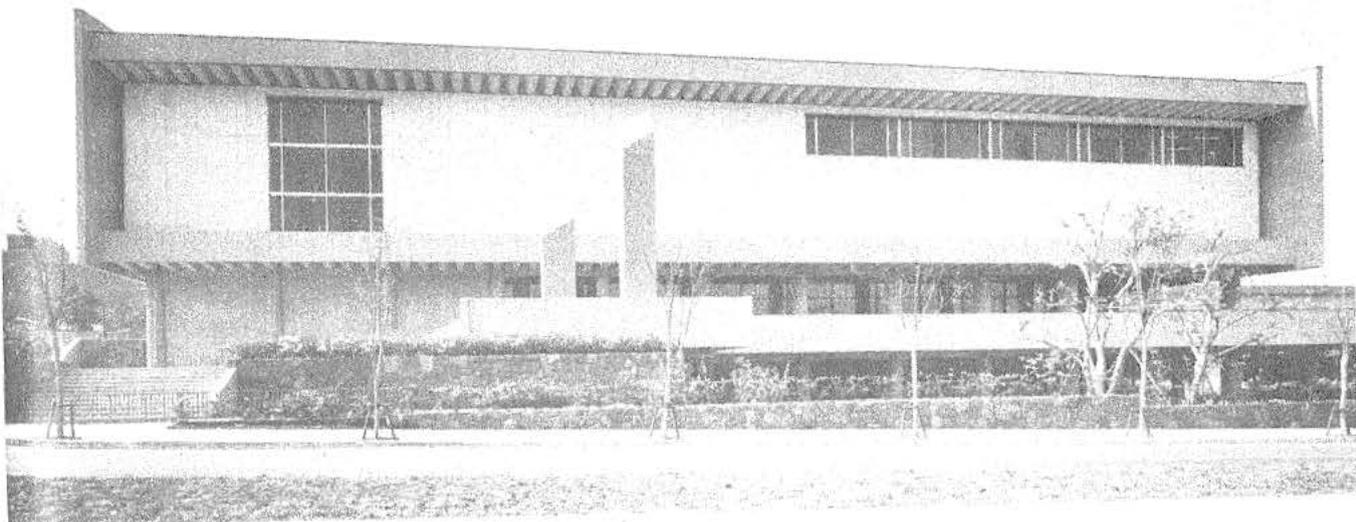
石橋正二郎氏から、国への寄贈は五月七日、総理、文部大臣、文化庁長官の出席のもとに行なわれ、六月十一日から開館される。この新館「こけらおとし」記念の特別展としては、「現代世界美術展」——東と西の対話——を企画し、現在世界の現代美術を代表する作家の秀作を海外約八十点、国内約四十点を収集展示する計画で着々準備を進めている現状である。

△新館全景は表紙に掲載

月刊『文部時報』第1103号(昭和44年6月号)より
文部省(発行 ぎょうせい〔帝国地方行政学会〕)

▼東京国立近代美術館新館落成

東京国立近代美術館新館がこのほど皇居・北の丸公園の一角に完成、5月7日に竣工寄贈式が行なわれた。この新しい美術館は、同館の評議員であり美術に特に理解の深い石橋正二郎氏が建設して国に寄贈したもので、設計は芸術院会員谷口吉郎博士が担当した。京橋旧館の約3.8倍の1,300m²余の広さで、2・3・4階の展示場は階層をかえた中2階、中4階を設けて観客がしらすしらすのうちに階をのぼるよう意図され、ゆとりのある鑑賞ができるよう立体的な構成となっている。〈写真は正面から見た東京国立近代美術館新館〉



月刊『文部時報』第1104号(昭和44年7月号)より
文部省(発行 ぎょうせい〔帝国地方行政学会〕)

▼ 東京国立近代美術館

スタート

先月号のこの欄で紹介した東京千代田区北の丸公園に新設された東京国立近代美術館の開館式が、6月11日に常陸宮ご夫妻をお迎えして行なわれた。式には今文化庁長官、高橋日本芸術院長、この館の寄贈者石橋正二郎氏ら関係者多数が出席した。式が終わったあと、新館開館を記念して現代世界美術展が催されている1階特別企画展示室入口にはられたテープに常陸宮妃殿下がハサミをいれられた。

〈写真はテープを切られる常陸宮妃華子さま〉

